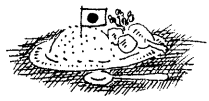
学校訪問旅行記（その五）

村田修子



苦労のすえ夕方到着したコペンハーゲンのあかりは、ほのぼのとした暖かさが感じられました。全員の顔も生き生きとしていて、比較的中心から離れた三流どころのホテルであったにもかかわらず、不満の声も聞かれませんでしたし、心からゆったりと過ごすことができた一夜でした。

ここでの一般視察のガイドをしてくれたのはトモコ・サトーという日本の女性でした。その人の出身地が東京で、しかも私の大学のすぐそばということなのでとても近しい感じがしました。しかし彼女は職業柄日本人に会うことも多いのでしょうが、至極あっさりしていて私の方が懐かしがったという感じでした。それは何日か前アメリカで、かつて私の園を卒業し、現在ニューヨークで生活している方とお会いして旧交を温めたとき感じたのと同じでした。その方とお別れするとき、私はホテルの下の出口まで送りましたが、挨拶をして別れたあとは振り返ることもなく淡々と帰ってゆかれました。私の方はなんとなく物足りなく思うと同時に、大変日本的な自分を見出しましたし、外国生活で身につけられたものとの違いを感じたことでした。

コペンハーゲンで案内してくれたそのトモコ・サトーさんは二人の子どものある人なので、子どもの教育に関したことも少し話してくれました。

国、市、教会の経営の園があって、どれも国が補助してくれるし、両親の収入の額によってそれぞれ払う金額が違うけれども、日本とは違ってほんのわずかな費用で朝六時から午後五時まであいているし、看護婦のいる託児所は一年中あいているということでした。これも、婦人は働いてい

◀大通りの中央に作られた子どもの運動場

るものが多いことを物語っています。

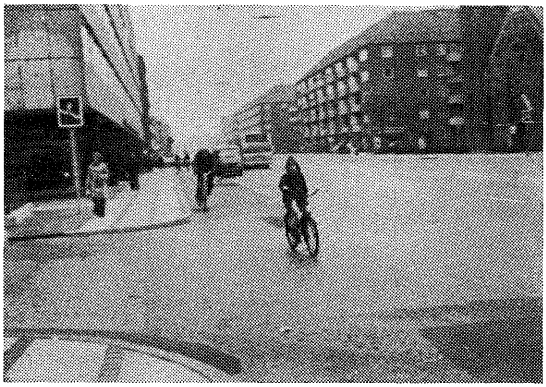
また、社会保障制度が確立している国なので税金でそれらをすべてまかなかっている関係上、基礎控除を除いたあと四〇%は国に納めるということです。非常にたくさん税金を納めることに対して「それで不満はないのか？」という質問に、「ゆくゆくはみんなその恩恵をこうむるのだから別になんでもない。当り前と思っている」ということにも社会情況の違いをひしひしと感じました。

他の国の関心をひいている「性教育」については、小学校の段階から学校で教える、ということでした。そして本屋の店頭にはそれに関する本をたくさんみかけました。

店のたくさん集まったところは活気に満ちていましたが、一帯に明るくそして落着いた雰囲気で、広くとられた道の中央に子どもの遊び場が作られ、そこには木のわくのぼりや、木馬、シーソー、木のベンチなどが置かれていました。さすがは北欧と並んで木製家具、遊具の本場だと思いました。もみの木もたくさん作られて、ヨーロッパの各地に輸出するそうです。

そこで聞いたクリスマスの風習も印象的でした。十一月に入るとそろそろ贈りものの交換が始まるそうです。早くもらってもクリスマスまでは絶対にあけないで、もみの木の下に置いておき、当日その木のまわりで丸くなりダンスをして、つかれると床に座って贈りものをあけ、それからごちそうを頂くのだそうです。もらってもすぐあけてみてしまわないで、楽しみに夢をみつづけさせるこの風習は、アンデルセンなどがたくさんのメルヘンを生んだこの辺の感興と相通ずるものがあると思いました。

最近日本でも「子どもの広場」とか「自転車広場」などとめいうって、子どもたちが危険なことなく自転車遊びができるよう



◀車道と区別された自転車道

なところも設けられるようになりましたが、コペンハーゲンの新しくひらけた方の道には、広い車道と歩道の中間に、自転車専用の道が既に設けられているのに感心しました。行き当りばったりでなく、先を考え、全体をふまえた上での計画であることがよく分かりました。

次の訪問地イタリーもいろいろの面で期待していたところでした。道ばたの崩れた土塀、勇者が通ったという昔ながらのアッピア街道、コロッセウムなど、歴史が至るところ手が届きそうにごろごろしているのには感激しました。けれども観光一本であるローマでは、日本人と見れば日本語で話しかけ、日本語版の解説本を目先に振りかざしたり、〝モシモシ　カメオ〟とカメオの製品を売りにくる様子は、なんとなく哀れで、自分を失っている、とさえ思えました。

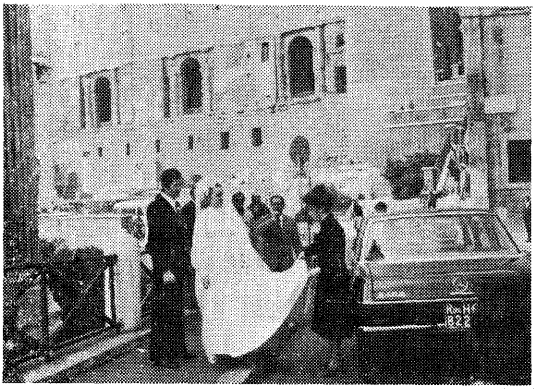
世界的に不況であるにしても、発展的な産業を持たないところの人たちの活気のなさを感じました。

そこで説明をしてくれた日本人のミスター・山口もいろいろな説明の合間に、イタリーの教育について話してくれました。

義務教育を終えるのが六〇％で、四〇％は途中でやめてしまうため全体的に文盲が多いということで、この問題に対処するために成人教室が開かれていて、これにより小学校や中学校を出た資格をもらえるようになっているということです。

現在教育改革案が出されていて、高校を三年にちぢめ、中学を五年にしようとしているそうですが、このことなども、一般教育の振興を目指している施策だと思います。

幼稚園は満三歳から公立幼稚園に行き、それ以前は私立保育園に行きます。そこでは家庭的なこと（お母さんがどのようなこ



◀コロッセウムの花嫁

とをしているかを教えるため、洗濯、料理、アイロンかけなど）を教えているということで、ここも園が少ないので仲々入りにくいそうです。

この話から先程、町の中で物を売り歩いていた人たちの様子を思い出して、その国の一般的な教育の程度というものがこれほど影響を持っているものであるということを目で見せられた思いがしました。

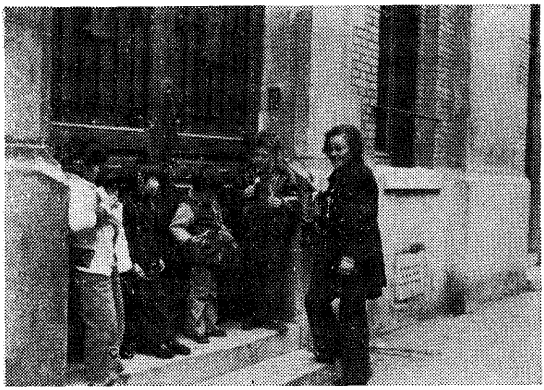
コロッセウムでは丁度結婚式をあげたばかりの花婿、花嫁さんに会いましたが、そのときの衣裳のまま遺跡を回るのが風習なのだそうです。記念すべきときに、歴史あるところを二人で回り、やがては歴史をになうものであるという自覚を持つことからきているのではないかしらなどと考えました。

また、コロッセウムの低くなった一部が猫捨て場になっていて、たくさんの猫がいて、老人などがそこへ餌を持ってきてやっていました。それはローマ時代ペストが流行したとき猫がひと役買った功績があるために、猫がふえたらここへ持ってきて捨てる、ということでした。こんなところにも歴史がありました。

「ローマの休日」の映画を思い出しながら、余りにぎにぎしくて別な処かと思ったトレビの泉を見たり、「終着駅」バンコ・デ・ローマに丁度居合わせた汽車に乗り込んで写真をとったりしているうちに動き出しそうな気配になったのでとびおりると、同時にガタンと発車し、思わず冷汗をかいたりしたひとこまもありました。

それにしても、美しいベスビアスの噴火によって埋められたというポンペイの遺跡では、現代に劣らない生活の知恵、設備などに驚きの一日を過ごしました。

帰りに立ち寄ったナポリ湾の美しさもさることながら、道の両側の家から家へ張られた綱に干されている満艦飾の洗濯物は、



▼パリの町かどの幼稚園で迎えを待つ子どもたち

名物という説明でしたが、所変われば品変わるの感を深くしました。

丁度「死者の日」という行事の日に当たったことや、バチカン市国のサントピエトロ寺院の四枚ある扉の右端は、二十五年目ごとに開かれるということで、それが丁度開かれている年に当たっていたのでその下をくぐって中に入ったことなどは、今後そういうニュースなどを聞いたときにまた、身近なこととして思い出すことでしょう。

各地でいろいろな知識を得て過ごしているうちに、旅程は帰路の方向に向っていて、本当に地球は丸いのだなあ、という実感を得ました。アルプスを下に見下し、パリのオルリー空港についた私は、何年か前ここで事故に会った教え子の冥福を祈り、なんとなく晴れない気分でした。日本人が大変多いのに少々あきれながら、残り少ない日々、寸暇を惜しんで歩きました。

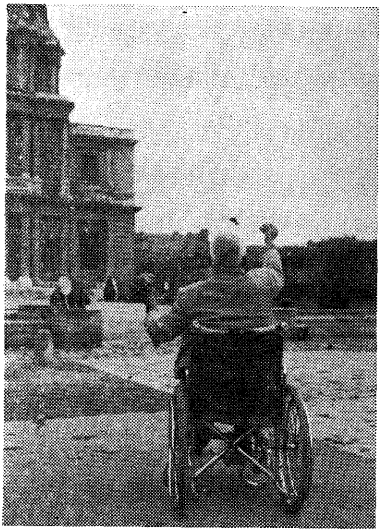
よく聞くマロニエという植物が栃の木であることを知り、そのきれいな茶色に色づいた道いっぱいの枯葉の道を歩きに歩いて、夜遅くシャンゼリゼから凱旋門まで行ったり、ムーランルージュでショウを見るだけでなく、前座の音楽に合わせて、〝これも思い出〟とばかりステップを踏んだのも、絶対に忘れられない私の歴史の一駒です。

町の中ではどこでも同じように人びとが生活をしていますが、やはりその感じが違います。パリは今迄過ごしてきたところよりは何となく冷たい感じがしました。特に買物に行ったときのふれ合いは、ワンクッション何かがあるようでした。でも町の中で見かけた幼稚園の子どもたちや、そこの先生たちは暖かいものを感じさせてくれましたので救われた思いでした。

それにしても、再びの経験である霧をついて訪れたベルサイユ宮殿は、昔の権威を

見る思いでした。日本の赤坂離宮と規模こそ違いますが、日本では手続きをしてやっと見せて頂いたことを考えますと、イギリスのウィンザー城と同じに、今でもなにかことがあれば使っている宮殿を、いつも開放して多くの人に見せている点には感心しました。

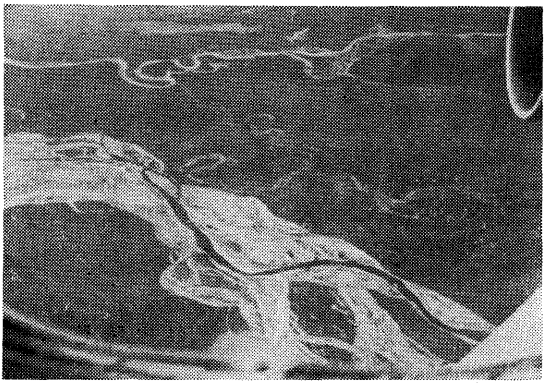
特に歴史のあるところはちょっとだけ綱を張って入らないようにしてありました。そこで情ない思いをしました。その入っていけないコーナーへ日本人が入っていって由緒ある椅子に掛け、友人と写真を撮り合っているのです。皆にがい顔をして通ったり、ごそごそと言いましたが一向にやめる様子もないので、私共のガイドさんが止めました。少々顔を赤らめたものの目的を果たすまでは戻ってきませんでした。一人だったらきっとやらなかったに違いないのですが、群衆という状態になるとマナーも何もなくなる日本人の、社会的訓練の身についていない情けない面を見せつけられてしまいました。もう一度そういうことを見かけたら「私は日本で教師をしているものですが……」と言ってやめるように言おうと思いました。それは先ほどの人のように、女性に注意されるとやめるどころか、あざけるような態度に出てくることを経験しましたから。そういうようにしなければならないこともまた情けなく思ったことでした。



▲鳥に餌をやる老人

やはりイギリスで会った少年のように、小さいときから、また生活全体がそうならなくては身につかないものである、と思うと同時に、私たちのたずさわっている仕事の重大さを思わないところでかみしめました。

もう一つ花のパリで印象深かったことは、ナポレオンの墓のあるアンバリットというところに行ったとき、そこの附近には廃兵院があるということで、手押車に乗っ



◀機上からみたアラスカ

た老人がいて鳥に餌をやっていました。

その老人が手に餌を握って上の方にあげると、左右の木、前の建物のあたりから、鳩や雀などが本当に音がするように、さあっとおりてきてその餌をついばみ、また元のところへ帰るのです。驚いたことに、人になれにくいといわれている雀もとんできて餌をもらっています。肩や手にとまっていることもありました。私もひとつやらせてもらおうと思ってその人から餌を少し分けてもらい、同じように手をあげてみましたが、何度やっても私のところへは鳥はきませんでした。

そのかたは一日に何回か来て餌をあげるのだそうです。慣れ、とはいっても私にこなかったことから考えて、やはり何等かの形でその人と鳥との間には相通ずるものがあるのでしょう。それを生きがいとし、真剣な気持ちで接することは、鳥にも分かるのだと思いました。

帰りの十七時間は、提出期限の迫ったレポート書きに忙しく過ごしましたが、その間飛行機の上から見たアラスカの変化は、全く自然の驚異を見せつけられた感じでした。私が考えたこともない世界があり、この割れた氷河はだれに見られ、知られるでもなくごく少しずつ変化しつつ年中ここにあるのでしょう、なんだか自然の偉大さに圧迫されるようでした。それだけに木が見えたとき、ここでも生きているものもあるのだ、と樹木を本当に生きている生き物として見ている自分を発見しました。

＊　＊　＊

私はよく「自分で実際にやらなければ、やったことにならない……」と若い人に言います。至極当然なことなのですが、私はいま私にとっての大旅行を終えて、いろい

ろなことを経験しましたが、時がたつにつれて「本当に自分でやったのだ」という感じが強くなってくるのです。

最後に、こういう旅行に参加してのものの見方として、「○○はこういう状態で、日本の現状は……。こういう点が遅れている……」というように日本と比較して見る見方もありますが、それぞれの国の、みな違った背景を持つ中で生活している人の発想により作り上げられたものを、日本人の発想の範囲だけで考えることは余り意味のないことだと思います。日本人が不得手といわれる、少し離れて客観的にものを見る、という態度がこれからは特に必要だと思いますので、私も見てきたものをまねるだけではなく、よく自分のまわりとの調和の上で役に立てたいと思っています。

出発前おっくうに思った旅行はいろいろなもの事を私に教え、感じさせてくれました。そして、私たちだけではなく、少しでも多くの人たちが同じような経験を持つことが必要だと思いました。現在はいろいろな企画があって比較的簡単に海外に行くことはできるのですが、私たちも仕事にたずさわっている関係上、休暇に入らないと思い切って出かけるわけにはゆきません。工合が悪いことに、そのときは訪問先も休みに入っていることが多いのです。でもこの計画は「学校訪問」が主な仕事ですから、十分に実際活動している姿にふれることができるのです。

年に四十団、千人以上がこの研修に参加する機会を与えられるのですが、幼稚園の団はたった一つしかないのです。たくさんの人が参加できるようになれない理由（義務教育ではないとか、幼稚園としての予算がとれないとか）はあるでしょうけれども、教育は小学校から始まるのではないのです。段々に積み上げられていくものでその間には何等の区切りというものはありません。そしてその接点が非常に大切であることなどを考えますと、その時期の教育にたずさわっているものが幅の広い識見を持っていることは絶対に必要なことです。そういうことからしても、もっとたくさんの人が経験できる機会を与えて頂くことを心から望みますし、向いてきたチャンスは絶対に手にすべきだと思います。

それにしても、家族の者以外とこのように一か月も一緒に過ごしたことはかつてないことですし、今後もありえないと思いますが、本当に全員が健康で何事もなく過ごせたことは幸のひとことに尽きます。

（終り）

（お茶の水女子大学附属幼稚園）